

空想科学小説誌

SFマガジン

〈科学者SF特集〉

ウィーナー 前頭葉
リチャードソン 新人アンダースン
シラード グランド・セントラル駅

〈SFクラシック〉

ジョーンズ ジェームスン教授シリーズ
惑星ゾルの王女

〈本格中篇180枚〉

ラッセル 最後の爆発

1968

早川書房

MAGAZINE OF SCIENCE FICTION & FACT



連載コラム

SF実験室 ⑧

SF解剖学のすすめ

(その3) 宇宙讃歌

野田宏一郎

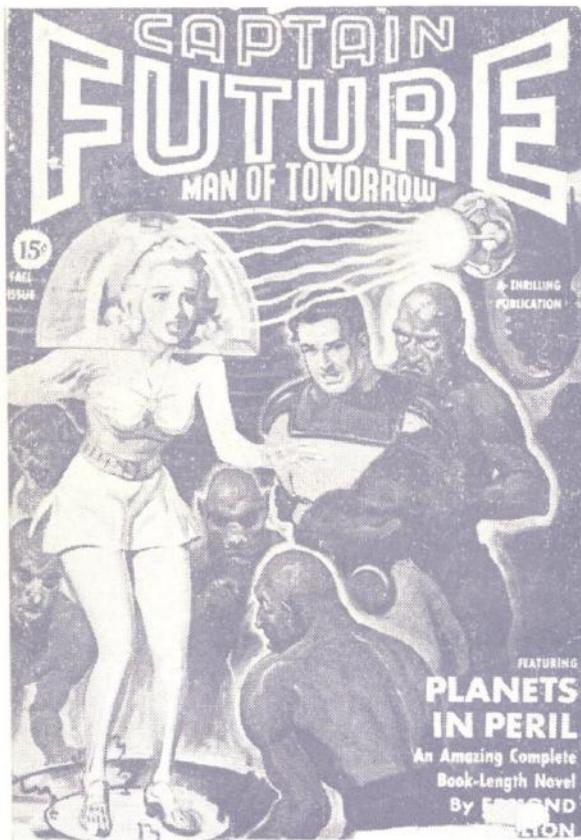
Y・ANDROID・MUTANT・ROCKET・SOL・FUTURE・ANTI GRAVITY・TELEPATHY・GIZMO

戦記ものや歴史ものを読むとき、地図をそばに置いて参照しながら読んでみると、これまでとはちがつたあららしい味わいを感じることが多い。先日も、マレー沖海戦のときの日本海軍機の索敵線まで入った地図のつている戦記を読んで、あらたな感激をおぼえたものである。

例外はあるにしても一般の作品の場合は地球上の出来事だし、地図などはなくとも頭の中でおおよそのアウトラインができるいるからさほどのことはないが、宇宙ものSFの場合、それも太陽系内ならまだいいが、銀河系せましと主人公が活躍する話となると、もうこっちの頭がついて行けない。だからこんなところをよほどよく書いておいてくれないと、『銀河系せまく』の意味がなくなってしまうのだ。

ただ、星図とつき合わせてみるとまさにそうなるはずだし、べつに何の変哲もないことなのだが、ただそれだけのことではなかよほどリアリティがあるような気がしてくるから不思議なものである。映画『二〇〇一年宇宙の旅』で、パンアメリカン航空のマークをつけたスチュワーデスがでてくるだけでなにかうれしくなるのもちよつと共通したところがある。

太陽系周辺ならありあわせの星図で間に合うが、すこしはなれてくれば、恒星の相対位置も変って星座などというものが通用しなくなるだろうし、銀河系から外にとび出せば、島宇宙の三次元地図などいうものがすでにできているのやらどうやら、すくなくとも素人の我々はおいそれとお目に掛れない。こうなつてくると、すっぱり割り切つてくれない限り、読者は太陽系内を旅行しているのとあんまり変わらない印象しかうけなくなつてくる。という方に考えたのかどうか、今度、岐阜のファンがE・E・スミスの『スカイラーク』シリーズを読むための『スカイラーク宇宙図』というやつを発行した。小生の知る限り、これだけのものは世界でも始めてではないか



キャプテン・フューチャー誌の表紙

とおもう。これを片手に「スカイラーク」をもう一度読んでごらん。「スカイラーク」が一段とたのしくなること、絶対に保証する。岐阜市のベムクラブのファンジン「ベム」の第六号。編集者は岡田正哉氏。そもそもこれは「スカイラーク・シリーズ用語索引」として編集されたものに入っているのだが、この手のものでは「Universe of E.E. Smith」というタイトルで「レンズマン」ものも含めた立派なハードカバーが出版されているけれども、宇宙図まではのっていない。余談だが巻頭には「For MINE with all my love」とある。MINEというのは字引をひいてみると「地雷」あるいは「鉱山」あるいは「私のもの」という意味だそうで、いずれにしろへんなものに捧げるひとである。地雷に捧げるなど、この人は爆薬魔なのかもしれない。

作家が「スカイラーク」のような作品を書くときは、おそらく頭の中にはその位置関係がちゃんと整理されているはずだし、ハインラインの未来史年表みたいに巻末につけてくれると一段とたのしくなるのにと思う作品も決して少なくない。

ところでこの「スカイラーク・ハンドブック」はSFファンの間にかなり大きな反響があり、刺激を受けたものも多いらしく、未知の中学生のファンから「キャプテン・フューチャー・ハンドブック」をつくりたいので、「キャプテン・フューチャー」誌を全部貸して下さい」という電話がかかってきた。全訳されているわけではないし、舞台も主に太陽系内だし、登場人物もそんなに多くはないからあまり意味がないでしょうと答えておいたが、実は、この「キャプテン・フューチャー」という雑誌は最初からこの線を狙つてつくれられているのである。

先月号が「アーティング・ストーリーズ」誌ならば、今月は当然「アスタウンディング・ストーリーズ」誌というのが筋だけれど、先にすこし高飛びをして、今月はこの「キャプテン・フューチャー」誌を紹介することにしよう。なにしろ、古いSF雑誌を見たいというSFファンの大部分のお目当てが「キャプテン・フューチャー

CONTENTS	
VOL. 3, NO. 2 FALL, 1941	
A Complete Book-Length Scientific Fiction Novel	
THE LOST WORLD OF TIME	
By EDMOND HAMILTON	
The Futuramen Race into the Past to Answer a Cry for Help that Has Travelled Across a Hundred Million Years! Follow Captain Future as the Greatest Enigma of All Time Transports Him into the Forgotten Ages.	
Thrilling Short Stories	
LONG, LONG AGO	Frank Bellamy Long 97
A Story of Science Changes the Future of Interplanetary Travel	
UNDERSEA, SNATCH	William Morrison 107
Undersea Snatch Was No Fairy Tale to Little Nellie	
Scientific Fiction Serial Novel	
THE MAN WHO AWOKE	Laurence Manning 115
The Great Invention of a Great Science Fiction Master	
Special Features	
THE FUTURE OF CAPTAIN FUTURE	The Editor 10
THE FUTUREMEN	The Comet 94
THE WORLDS OF TOMORROW	Venus 104
UNDER OBSERVATION	Letters and Announcements 122
John THE FUTUREMEN, Our Great New Club for Readers!	

同誌 1941 年秋季号の目次

「明日の世界」欄より「上」未来世界地図「下」水星地図

一々誌なのだから先にまわしても叱られることはないだろう。

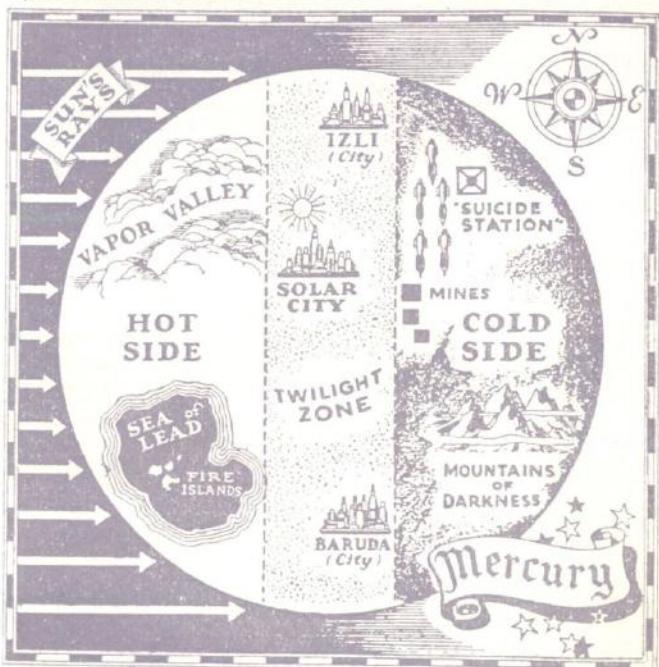
そもそも「キャプテン・フューチャー」誌というのは、一九四〇年の冬から四四年の春にかけて季刊の形で十七冊出版された雑誌なのだが、その毎号にこのキャプテン・フューチャーを主人公にした長編が一編ずつ発表されるという珍らしい形式をとっている。そのうちの三編がハヤカワSFに邦訳されているが、おなじハヤカワSFに入っているケネス・ロブソンの「ドック・サヴェッジ」シリーズも同じような形式で、これは一九三三年三月から一九四九年六月まで実に一八一冊、つまり一八一編も発表されている。

読まれた方もおありとはおもうが、この「キャプテン・フューチャー」シリーズというのは、二十一世紀に月面のテコ・クレーターや本拠をもつカーティス・ニュートン、またの名キャプテン・フュ

ペーパーバックになつていていたことにいたく感激した様子である。

一九四〇年といえば、これまで「アーマージング・ストーリーズ」に「アースタウンディング・ストーリーズ」、それに「スリリング・ワンドーム」「マーヴェル・テールズ」が五冊出たきりでつぶれていくが、どうとばかりに色とりどりのSF雑誌があらわれた年である。このあたりについてはまた稿をあらためるつもりだし、本欄六七年十一月号を参照していただきたい。

おなじ一九四〇年といいながら、「キャプテン・フューチャー」が出たのはおそい方で、その年、既に創刊されていた雑誌は十冊以上もあった。そこに、当時「スリリング・ワンドーム」や「スター



「チャーリー」という青年が、亡父の親友サイモン・ライトの「脳」、アンドロイドのオットー、ロボットのグラッグという部下と共に高速宇宙艇コメット号を駆って太陽系せましとばかりにとびまわり、弱きを助け強きをくじくという物語で、戦前のスペイン・オペラはなやかなりし時代の代表的なキャラクターとして今日もひろく親しまれている。スウェーデンではごく最近「キャプテン・フューチャー・ファン・クラブ」が組織されたと、作者のエドモンド・ハミルトン自ら知らせてくれた。彼自身もこのシリーズには大変愛着をもつてゐるらしく、邦訳が出たといつて大変よろこび、特に、ちゃんとしているらしく、邦訳が出たといつて大変よろこび、特に、ちゃんとして

リング・ストーリーズを出していったペター・パブリケーションがさらにこの「キャプテン・フューチャー」を創刊したのは、編集者のレオ・マーギュリーズが前年の第一回世界SF大会の盛況にすっかり圧倒され、自信をつけたからだといわれているが、この思惑は見事にあたり、今日でも同誌はSFファンの間でかなりの高値で取り引きされている。

大きさはA4判、SFマガジンよりひとまわり大きい。表紙はもちろん、その号のキャプテン・フューチャーの活躍ぶりがあしらわれているが、かなり出来不出来がある。この「キャプテン・フューチャー」シリーズには、唯一の女性レギュラーとして女諜報員ジョーン・ランドールという美女が出てくるのだが、後期になるとスペース・オペラ雑誌おきまりの肌もあるな服を着せられてのアワヤというシンボルがやたらと多くなってくる。

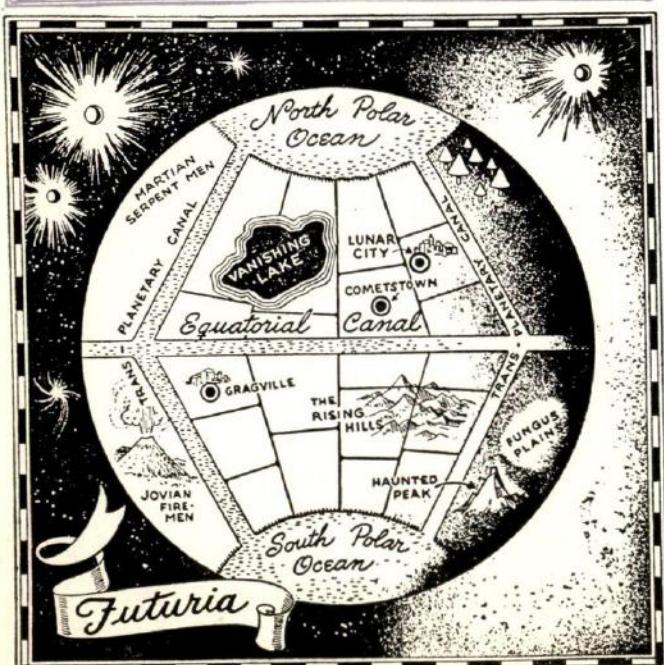
表紙をめくると、表2がエバレディー乾電池の広告。エバレディー乾電池のお蔭で助かりました、という体験談。右側のページはマッサージの通信教育の広告。以下ピアノ、電機、探偵、ボディビルなどの一頁広告のつづく間に目次がはさまっている。邦訳も出ていた『時のロスト・ワールド』(SF3123)が載っている一九四一年秋季号第三卷第二号の目次を見るとまず本編、それにフランク・ベルクナップ・ロンダとウイリアム・モリスの短編がひとつずつ、ローレンス・マニングのクラシック・リプリントが一編というの

が主なところなのだが、この雑誌の最大の特徴はコラムにある。まずVenusというサインで書かれているThe Worlds of Tomorrow(「明日の世界」というコラムは、キャプテン・フューチャーの活躍する時代の太陽系惑星の状況、それもその号の作品の舞台となつたものが中心に紹介される)。

たとえば地球は——「二〇世紀の半ばごろまでは、地球が大きな変動期にさしかかっている事実に気づいたものはひとりもいなかつたのである。もちろん冷却をつづける惑星本体が徐々に収縮する結果、地球表面にシワができ、これがいわゆる造山運動となつてさまざまな山脈を形成していることはよく知られていた。しかし、この運動は数百万年以前にアルプスやヒマラヤ、ロッキーなどができたときを最後に、その後はさして目立つほどの動きを示していかつた



（明日の世界）欄より
〔上〕人類発祥地デネブ星地図



〔下〕人工惑星フューチュリア地図

たし、もし再び運動がおこるにしてもさらに何千万年も先のことだらうと考えられていたのである。ところが一九四〇年になつて地理学者はこの問題についての見解を発表した。それによると、ヒマラヤ＝ロッキー＝アルプスの形成はこの運動のごく初期の段階にすぎず、近々に大変動が起きるだらうというのである……二〇二七年になつて、世界中の火山活動が活発になり、死火山までが噴火を始めたという最初の徵候があらわれた。特にチリ、ニュージーランド、日本、アラスカがその被害を蒙つた。世界中はパニックにおそれられた。これでも地殻の変動はまだ序の口だというのである。人々は火星や金星へ逃れようとして宇宙港に殺到したが、宇宙時代とはいながらそれだけ多数の人間を移住させるだけの宇宙船はないし、前方の惑星にも受け入れ態勢はできていない。そこで地球政府は、比較的地殻が安定していると考えられるアイオワ州、ボリビア、スリランカ、内蒙古などに難民都市を建設して時間をかせぎ、その間に避難用の大宇宙船を建造した……二〇二八年九月十二日の早朝、地球全土をおそろしい嵐がおそつた。そして、これまで



HOW CURT NEWTON BECAME CAPTAIN FUTURE

The World's Greatest Spec-Force Begins His Trail of Adventure When He Battles for Justice on Pluto!

UPON the hot surface of the Arcto planet Pluto, there gleamed a big diamond ring. Like a satellite of seven lights, it was the planet Earth on the frigid planet. For this was in the wild, uncharted regions where huge mineral veins to come had yet been found.

Across the blinding-yellow expanse of the burning plains, a small group of native Plutoans hurriedly fled toward the Earthmen trail.

These natives of Pluto, towering men with bodies were completely covered with long, dark hair, had long, sharp, fang-like canines, and a nose which implied acts of oral aggression, mixed with their several designations high with the sun, regularly brought no exchange with the Earthmen tribes.

The Young Earthmen.

With the Earthmen marched an oddly attired figure, looking Earthmen, hardly more than a youth.

He wore a heavy felt coat-and that could not be said of him!—and a wide-brimmed, protecting wide-brimmed hat. Yet his yellow, bandanna face and clear gray eyes were filled with excited interest.

"I am here to help you Earthmen," he said, "and to help you win back your home. Once I have won back my home for the Earth Men!" he added, the towering Plutonian leader knew him, speaking the last words with infinite earnestness.

MEET THE FUTURE!

In this adventure, which is a regular feature of CAPTAIN FUTURE, we present you further with the companion of CAPTAIN FUTURE, CURT NEWTON, who is now the most popular boy hero in the world.

Here you are told the whole, wild story of Earth and the new, exciting experiences of Captain and the new-comer members of Captain's crew as they travel from planet to planet.

They had been dwelling with the Plutonian natives, in their strange country of Queen, north of the Arcto Sea. Curt and his crew had been the unique drivers of Earth.

Oran answered plausibly. "We get dried enough, these days. The first Earthmen leaders were fair, but now they claim greater power than ever before."

"That's right," said Curt. "They're the bloodied, incredulous. 'You must be strong, Oran. Earthmen wouldn't treat you so.'

First to Visit Pluto

Curt Newton was eighteen years old.

And this was his first visit to Pluto. He had just left Earth on a voyage that had taken him over many worlds, many suns, many stars, many planets, and continents, or through the whole Solar System. This exhaustless tour of the universe had been designed by the Earth as the conclusion of Curt's unparalleled education.

Unpublished had been Curt's education,

but, as the Earth's guardian — Prince

Wright, the Devil's Guru, the ancient and

the young — had caused him and given him a training in scientific wizardry and in

other arts which no other

stars could have given.

The surprising result had caused to leave

Earth, to see the rest of the great Uni-

verse, to learn all about it, to explore and colonize. But now, with some

hesitation, had the Devil given his ready

Planes to Planet

Now, for months, they had been making

this way from planet to planet in their small space-ships. Young Curt Newton had found the secret of Maroon Jacobs, the discover of Jettie, the secret of the Arcto Sea, of Earth and the new, exciting experiences of Queen, all at last made.

Now, he was here, near the Arcto Sea. They had been dwelling with the Plutonian natives, in their strange country of Queen, north of the Arcto Sea. Curt and his crew had been the unique drivers of Earth.

〈フューチャー・メン〉欄

なんとか持ちこたえていた地殻の均衡がやぶれ、ついに大変動が起きた。これがスペース・オペラのたのしいところ)……

かくしてできあがつたのが二一世紀の世界地図、北アメリカとシベリア、南アフリカ、ヨーロッパとアフリカ、オーストラリアとニューギニアが地続きとなり、日本列島もアジア大陸とつながつてかつての日本海は日本湖になり、そのほか東地中海、西地中海、バルチック湖、メキシコ湖、それにアフリカの西部にかなり大きな島があらわれた……というわけ。で、キャブテン・フューチャー一党が地球を舞台に活躍するときの地球というのは、こんな地球であることを頭に入れておく必要があるわけである。

これが水星となると御覧のように、水星本体が自転をしないから昼ばかりのホット・サイドと夜ばかりのコールド・サイド、そしてその間にトワイライト・ゾーンがはさまれているというスタンダードな設定。住民はトワイライト・ゾーンにある首都ソラシティほか二つの都市に住んでおり、コールド・サイドには自殺基地と呼ばれる宇宙船のテスト場と、他に二、三の鉱山があるだけ。永遠の闇にとざされた酷寒の荒野に住んでいる動物はみんな厚い毛皮におおわれたやつばかりで、たとえば六本足の水星熊とか、断崖猫などがいる。この地帯の動物の特色は——眼玉がたくさんあること! そのため暗闇の中でも物がよく見えるのだという。一方ホット・サイドは蒸気の谷、鉛の海などがあり、もちろん人間や水星人は住めないが、硅素系生物である『太陽犬』(サンダッグ)や『太陽鷲』(サンライザル)などがある。このあたり、邦訳の『謎の宇宙船強奪団』(F3118)を読まれた向

これがおとなりの金星となると、やはり当時の一般的な金星のイメージ通りに非常に湿気の高い惑星ということになつていて。海の